

報に掲載した木簡の字句だけが一人歩きする危険性が極めて高く、遺跡に即した解釈に目をつむることになる。もちろん遺跡の報告もほぼ同様の理由で遅れていることも事実であるが……

そこで提案だが、発掘調査の終了後例えば三年、五年後には絶対に本報告を出版するという原則を確立すればどうか。完璧を期するのではなく、期限に達した時点での整理状況で印刷し、あとは木簡学会の会員諸氏の楽しみとして取っておくのである。短期間の整理では誤読あるいは折損木簡の接合不十分という問題が内包されており、それを読者に再度校訂してもらい学会誌や学会で公表し、成績のいい校訂者を表彰するのである。そうすれば概報や釈文だけにたより図版・図録を余り手にしない人たちへの危険信号にもなろう。

ざっと以上のようなことを思い浮かべたが、頭を冷やしてみると現段階では多少無理がある。というのは現物通りの図版印刷がなかなか困難だからである。従来は特別の和紙にコロタイプで印刷してきたが、近頃ではコロタイプ印刷自体が技術の向上が著しいオフセット印刷と大差なくなった。『平城京木簡——長屋王家木簡——』ではオフセット印刷に変更し、赤外線写真を墨跡の波長に合わせて得たより鮮明な画像をデジタル化して、それが即印刷に反映するように試みた。こうした努力によってこれまでよりも鮮明な図版を得ることができたと確信しているが、なお本物にはおよばない。この辺の状況について会員諸氏の判断と助言を仰ぎたいものである。

(町田 章)

目次

卷頭言……………町田章……………1

一九九六年出土の木簡……………1

概要	吉川真司	1	大阪・樟葉野田西遺跡	谷川博史・西村健司	42
凡例		5	兵庫・三条九ノ坪遺跡	高瀬一嘉	44
奈良・平城宮跡	古尾谷知浩	8	兵庫・大物遺跡	岡田務	45
奈良・平城京跡	山下信一郎	17	兵庫・深田遺跡	益田日吉	48
奈良・藤原宮跡	寺崎保広	21	兵庫・安倉南遺跡	中村弘	49
京都・恭仁宮跡	鍋田勇・和田萃	23	兵庫・明石城跡坤櫓	渡辺昇	50
京都・長岡京跡	中島信親・国下多美樹・清水みき	27	兵庫・明石城武家屋敷跡	稲原昭嘉・山下俊郎	52
京都・平安京跡左京八条三坊十四町（八条院町）			兵庫・袴狭遺跡	小寺誠	56
	太田吉男・上村和直	32	愛知・印場城跡	七原恵史	63
京都・末窯跡群	橋本俊介	36	静岡・角江遺跡	中川律子	65
大阪・大坂城跡	黒田慶一	37	静岡・御殿・二之宮遺跡	佐口節司	66
大阪・広島藩大坂蔵屋敷跡	伊藤純・鳥居信子	39	静岡・川合遺跡志保田地区	鈴木良孝	68
	豆谷浩之		神奈川・北条小町邸跡	原廣志	70

東京・伊興遺跡	佐々木 彰	72
東京・丸の内三丁目遺跡	小林 裕	74
東京・汐留遺跡	石崎 俊哉	84
東京・江戸城外堀跡 牛込御門外橋詰	羽木 真	90
東京・尾張藩上屋敷跡遺跡	並木 仁	92
東京・青山学院構内遺跡	池田 治	94
埼玉・岡部条里遺跡	福田 聖	96
滋賀・上山神社遺跡	杉浦 隆支	97
滋賀・湯ノ部遺跡	瀬口 眞司・藤田 琢司	99
滋賀・観音寺城下町遺跡	岩橋 隆浩	101
滋賀・小谷城跡	山崎 清和	104
岐阜・高山城三之丸堀跡	田中 彰	106
長野・松本城三の丸跡土居尻	竹内 靖長	109
長野・松本城下町跡伊勢町	竹内 靖長	112
群馬・前橋城遺跡	片野 雄介・高島 英之	116
福島・大猿田遺跡	今野 徹・平川 南	119
福島・根岸遺跡	猪狩 忠雄	124
福島・泉平館跡	堀 耕平	126
宮城・山王遺跡	村田 晃一・吉野 武	128
宮城・舟場遺跡	八嶋 伸明 吉野 武	133

岩手・無量光院跡	岩手・志羅山遺跡	山形・後田遺跡	山形・亀ヶ崎城跡	山形・宮ノ下遺跡	山形・上高田遺跡	山形・大楯遺跡	秋田・弘田柵跡	石川・長田南遺跡	石川・金石本町遺跡	富山・田尻遺跡	新潟・大坪遺跡	新潟・舞臺遺跡	新潟・馬寄遺跡	新潟・下町・坊城遺跡	新潟・新発田城跡	鳥取・目久美遺跡	島根・天神遺跡	島根・三田谷I遺跡	広島・鴻の巣東遺跡	広島・吉川元春館跡
----------	----------	---------	----------	----------	----------	---------	---------	----------	-----------	---------	---------	---------	---------	------------	----------	----------	---------	-----------	-----------	-----------

菅原 計二	菅原 計二	丸山 晶子	小関 真司	斎藤 俊一	斎藤 健	伊藤 邦弘	児玉 準	宮下 幸夫	久保有 希子	三島 道子	田畑 弘	伊藤 秀和	伊藤 秀和	水澤 幸一	鶴巻 康志	高橋 浩樹	岸 道三	鳥谷 芳雄	立川 敏之	沢元 保夫
135	137	140	144	146	148	150	153	162	163	165	166	168	170	171	172	178	179	182	184	185

山口・長登銅山跡	池田 善文・森田 孝一	八木 充	188
高知・飛田坂本遺跡	小嶋 博 満	203	
福岡・博多遺跡群	菅波 正 人	206	
	福岡・香椎B遺跡		
	熊本・鞠智城跡		
	宮崎・前田遺跡		
	沖縄・那覇港周辺遺跡群旧東村地区		
	瀧 本 正 志	208	
	西 住 欣 一 郎	212	
	東 憲 章	213	
	玉 城 安 明	215	
一九七七年以前出土の木簡(一九)			217
岡山・美作国府跡	岡 田 博	217	
韓国出土の木簡について	李 成 市	221	
史料紹介 琉球の木簡二題	山 里 純 一	251	
書評 山里純一著『沖縄の魔除けとまじないーフーフダ(符札)の研究ー』	高 島 英 之	256	
書評 東野治之著『長屋王家木簡の研究』	鶴 見 泰 寿	262	
彙 報	鷺 森 浩 幸	270	
編集後記	鎌 田 元 一	272	

一九九六年出土の木簡

概要

本号には、昨年の研究集会で「一九九六年全国出土の木簡」として報告されたものを中心に、七〇遺跡から出土した木簡の釈文や検出状況などを掲載した。ご多忙中にもかかわらず、貴重な原稿をお寄せいただいた関係機関の方々に、心から御礼申し上げる。

本号掲載の木簡出土遺跡は、別表のとおりである。あわせて三〇都府県におよび、木簡の年代で言えば、古代二九、古代一〇中世二、中世一四、中世一近世五、近世以降一九、不明一となる。

古代の都城遺跡としては、まず藤原宮跡で「知夫利評由羅五十戸」と記した荷札木簡が出土した。平城宮跡では、東区朝堂院南面築地地区で朝廷儀式に関わるらしい木簡など四五九点、式部省東官衙で当該地区が奈良時代後半に神祇官であったことを推測させる木簡など二二〇点、東院園池地区で勤務評定に関する削屑を中心に七三一点が出ている。平城京では左京三条一坊七坪・東一坊坊間路と左京二条二坊十一坪から出土をみ、前者の木簡は諸陵寮の位置比定

に問題をなげかけた。また、一九七三年度から発掘調査が継続されている恭仁宮跡でも、本年初めて木簡が出土した。全部で八点（削屑三点）を数え、天平一一年末に廃止された「里」の文字が確認される荷札木簡も含まれている。長岡京跡では、猪隈院とも考えられる左京二条二坊五町の邸宅跡から荷札木簡が、また二条大路南側溝からは「内膳正解」と記した文書木簡などが見つかり、後者は長岡京時代の内膳司の体制について貴重な知見をもたらした。

地方官衙に目を移すと、本年最大の収穫は、山口県長登銅山跡から四三六点におよぶ木簡が出土したことであろう。和銅・霊龜年間から天平初年にかけてのもので、大型品を含む多数の記録木簡・付札木簡からは、銅の生産や輸送に関する豊かな情報を得ることができ、豊前門司宛の銅付札が十数点まとまって出土したこと、封緘木簡や春米荷札が含まれることなども注目される。また熊本県鞠智城跡からは、第一八次調査にして初めて、七世紀後半～八世紀前半のものと思われる荷札木簡一点が出土した。秋田県弘田柵跡では、「別当子弟」なる興味深い肩書のみえる文書木簡などが発見されている。郡衙関連遺跡としては、兵庫県袴狭遺跡から天平勝宝七年の

1996年出土の木簡

遺 跡 名	所 在 地	点 数	木簡の年代	遺跡の性格
平城宮跡	奈良県奈良市	1410	古 代	宮殿・官衙
平城京跡	奈良県奈良市	22	古 代	都 城
藤原宮跡	奈良県橿原市	1	古 代	宮殿・官衙
※ 恭仁宮跡	京都府加茂町	8	古 代	宮殿・官衙
長岡京跡	京都府向日市	10	古 代	都 城
平安京跡左京八条三坊十四町（八条院町）	京都府京都市	28	中 世	都城・都市
※○末窯跡群	京都府夜久野町	1	近 世	窯 跡
大坂城跡	大阪府大阪市	2	近 世	城 郭
※ 広島藩大坂蔵屋敷跡	大阪府大阪市	約300	近 世	蔵 屋 敷
※ 楠葉野田西遺跡	大阪府枚方市	3	中 世	集 落
※ 三条九ノ坪遺跡	兵庫県芦屋市	2	古 代	水田・自然流
※○大物遺跡	兵庫県尼崎市	3	古代・中世	遺物包含地
※ 深田遺跡	兵庫県尼崎市	1	古 代	集 落
※ 安倉南遺跡	兵庫県宝塚市	2	中 世	集 落
※ 明石城跡坤櫓	兵庫県明石市	2	近 世	城 郭
○明石城武家屋敷跡	兵庫県明石市	7	近 世	武家屋敷
袴狭遺跡	兵庫県出石町	16	古 代	郡 衙
※○印場城跡	愛知県尾張旭市	2	中 世	城 館
※○角江遺跡	静岡県浜松市	1	中 世	集落・水田・自然流路
御殿・二之宮遺跡	静岡県磐田市	1	古 代	官 衙
川合遺跡	静岡県静岡市	1	古 代	官衙関連
北条小町邸跡	神奈川県鎌倉市	5	中 世	居 館
伊興遺跡	東京都足立区	2	古 代	集 落
※○丸の内三丁目遺跡	東京都千代田区	187	近 世	武家屋敷
※○汐留遺跡	東京都港区	約700	近世・近代	大名屋敷・鉄道施設
※○江戸城外堀跡 牛込御門外橋詰	東京都新宿区	2	近 世	城 郭
※○尾張藩上屋敷跡	東京都新宿区	2	近 世	大名屋敷
※○青山学院構内遺跡	東京都渋谷区	4	近 世	大名屋敷
※ 岡部条里遺跡	埼玉県岡部町	1	古 代	集 落
湯ノ部遺跡	滋賀県中主町	6	古 代	検討中
※ 観音寺城下町遺跡	滋賀県安土町	13	中世末近世	城 下 町
※○上山神社遺跡	滋賀県能登川町	2	古 代	集 落
※○小谷城跡	滋賀県湖北町	一括り	中世末近世	城 郭
※○高山城三之丸堀跡	岐阜県高山市	11	近 世	城 郭
※○松本城三の丸跡土居尻	長野県松本市	16	近 世	城 郭
※○松本城下町跡伊勢町	長野県松本市	15	近 世	城 下 町
○前橋城遺跡	群馬県前橋市	3	近 世	集落・城郭
大猿田遺跡	福島県いわき市	8	古 代	集 落
※ 根岸遺跡	福島県いわき市	7	古 代	郡 衙
※○泉平館跡	福島県原町市	17	近 世	居 館
山王遺跡	宮城県多賀城市	2	近 世	集 落
※ 舟場遺跡	宮城県三本木町	1	中 世	集落・屋敷

※○無量光院跡	岩手県平泉町	7	古	代	寺	院
志羅山遺跡	岩手県平泉町	3	古	代	集	落
※○後田遺跡	山形県鶴岡市	23	中	世	集	落
※○亀ヶ崎城跡	山形県酒田市	1	近	世	城	館
※○宮ノ下遺跡	山形県遊佐町	1	古	代	集	落
※ 上高田遺跡	山形県遊佐町	6	古	代	集	落・河川
○大楯遺跡	山形県遊佐町	2	中	世	城	館
弘田柵跡	秋田県仙北町・千畑町	49	古	代	城	柵
※○長田南遺跡	石川県小松市	1	中	世	集	落
※ 金石本町遺跡	石川県金沢市	1	古	代	官	衙
※○田尻遺跡	富山県福野町	1	中	世	集	落
※○大坪遺跡	新潟県田上町	1	古	代	遺物	包含地
※ 舞臺遺跡	新潟県加茂市	4	古代～中	世	集	落・河川
※ 馬寄遺跡	新潟県加茂市	1	不	明	遺物	包含地
※ 下町・坊城遺跡	新潟県中条町	1	古	代	集	落・自然
※ 新発田城	新潟県新発田市	34	近	世	城	郭
※ 目久美遺跡	鳥取県米子市	1	古	代	水	田
○三田谷Ⅰ遺跡	島根県出雲市	4	古	代	集	落
※○天神遺跡	島根県出雲市	5	中世末	近世	集	落
※ 鴻の巣東遺跡	広島県東広島市	1	中世末	近世	集	落
吉川元春館跡	広島県豊平町	8	中	世	居	館
長登銅山跡	山口県美東町	436	古	代	官	衙
※ 飛田坂本遺跡	高知県須崎市	10	近	世	集	落
○博多遺跡群	福岡県福岡市	1	中	世	都	市
※ 香椎B遺跡	福岡県福岡市	7	古	代	集	落
※ 鞠智城跡	熊本県菊鹿町	1	古	代	山	城
※○前田遺跡	宮崎県宮崎市	1	中世～近	世	水	田
※ 那覇港周辺遺跡群旧東村地区	沖縄県那覇市	3	中	世	集	落

※は木簡新出土遺跡 ○は1995年以前出土遺跡

但馬国符など、出石郡の活動にかかわる木簡が出土した。かつて大量に発見された木製祭祀遺物とどのように統一的に理解するかが、今後の課題である。福島県の根岸遺跡と大猿田遺跡は約9km離れているが、同じ陸奥国磐城郡の郡衙跡・工房跡と考えられており、本年そろって郡統治の実態を示す荷札木簡が発見された。

このほか、一九九一年度に「丙子年」の木簡が検出された滋賀県湯ノ部遺跡からは多数の削屑（難波津の歌や具注暦に関連するらしいもの）、東京都伊興遺跡からは平安時代初頭の騎馬像を描いた木簡が出土している。山形県上高田遺跡・島根県三田谷Ⅰ遺跡など、平安時代の集落遺跡でも木簡の出土をみた。なお、兵庫県三条九ノ坪遺跡では「三千子年」と記した木簡が発見され、伴出遺物の年代観などから、白雉三年壬子を指すとみるのが穏当とされている。この見解によれば最古の紀年木簡ということになるが、なお慎重に検討される必要がある。

次に中世木簡であるが、平泉の志羅山遺跡と無量光院跡の出土品は、残念ながら内容がよくわからない。同じく意味不明ながら、博多遺跡群では表裏に九個、見事な花押を据えた木簡が発見され、鎮西探題などの奉行人クラスの花押ではないかと推定された。鎌倉の北条小町邸跡では、本年も若宮大路側溝の工事分担に関する木簡が出ている。宗教関係木簡の出土例はやはり多く、滋賀県上山神社遺跡・石川県長田南遺跡・新潟県舞台遺跡の呪符木簡、兵庫県安倉南遺跡の蘇民将来札、大阪府楠葉野田西遺跡の転読札・看読札・護摩札、山形県後田遺跡の「南無大日如来」札、平安京八条院町・滋賀県小谷城跡・広島県吉川元春館跡の柿経、兵庫県大物遺跡の無量義経経石の付札などがあげられる。なお特記すべきことに、沖縄県で初めて、発掘調査によって木簡が発見された。那覇港周辺遺跡群旧東村地区の一五〇一六世紀の荷札である。仮名書きである点は、古琉球時代の辞令書や金石文とも共通する特色と言えよう。

近世木簡の出土は、いよいよ増加している。一九九六年以前の調査ではあるが、東京都丸の内三丁目遺跡・汐留遺跡出土の木簡を本号に掲載できた。それぞれ一八七点・約七〇〇点にのぼる墨書木製品（大部分は木簡）は、送状・荷札・鑑札・通行札・呪符など実に多彩な内容と形態をもっている。このほか、大阪府広島藩大坂蔵屋敷跡で荷札の良好な一括資料が出土し、兵庫県明石城武家屋敷跡で米相場を「夜通飛脚」で知らせる時に用いた木簡が見られ、また群

馬県前橋城遺跡で花押を記した文書木簡が検出されるなど、近世城郭・城下町からの木簡出土例は枚挙に暇がないほどである。これらの出土木簡も、莫大な近世文書・記録が伝来しているのに比べれば数量的に微々たるものであるが、紙の史料とうまく組み合わせ、近世史研究に活かされてほしいと思う。その場合、近世木簡についても、鳥根県天神遺跡出土の荷札木簡のように、製作技法などが丁寧に観察・紹介されることが必要になってこよう。

以上、本号掲載の木簡を、私見によって簡略に紹介した。紙幅の関係で言及できなかったものも少なくないが、すべての木簡が貴重な文化財であることに違いはない。なお、九六年とそれ以前に木簡が出土した遺跡のうち、奈良県太田遺跡、兵庫県時友遺跡、姫路城跡、東京都明治大学記念館前遺跡、汐留遺跡（汐留遺跡調査会調査分）、白鷗遺跡、岩手県仙人西遺跡、青森県大光寺新城遺跡、福井県高架側道四号線遺跡、国際交流会館地点遺跡、石川県木ノ新保遺跡、四柳白山下遺跡は本号に収録できなかった。また、奈良県西橘遺跡、京都府平安京跡左京七条二坊八町、同左京九条二坊十五町、御土居跡、本圀寺、兵庫県赤穂城本丸跡、神奈川県佐助ヶ谷遺跡、滋賀県大將軍遺跡、長野県榎田遺跡、山形県大道下（旧月記）遺跡、新潟県牧目館遺跡、平林城跡、春日山城跡、伝至徳寺跡、広島県尾道遺跡についても、これまでに木簡が出土したという情報を得ているが、やはり掲載に至らなかった。このほかにも、まだ掌握できて

いない遺跡があるかと思われる。本会では、それらについてもできるだけ早く補足収載したいと考えている。関係機関の方々、および会員諸氏にいつその御協力をお願い申し上げる次第である。

(吉川真司)

木簡学会役員（一九九七・九八年度）

会長	狩野 久	町田 章	鎌田 元一
副会長	佐藤 宗諄	岩本 正二	佐藤 信
委員	石上 英一	栄原永遠男	館野 和己
	榊木 謙周	清水 みき	永田 英正
	清水 みき	東野 治之	本郷 真紹
	平川 南	和野 萃	山中 敏史
監事	岩本 次郎	八木 充	鈴木 景二
幹事	今津 勝紀	鷺森 浩幸	西村さとみ
	鶴見 泰寿	土橋 誠	山下信一郎
	古尾谷知浩	増淵 徹	渡辺 晃宏
	吉川 聡	吉川 真司	

凡 例

一、以下の原稿は各木簡出土地の発掘機関・担当者に依頼して、執筆していただいたものであるが、体裁および釈文の記載形式などについては編集担当の責任において調整した。

一、遺跡の配列はほぼ奈良時代の五畿七道の順序に準じた。

一、釈文の漢字はおおむね現行常用字体に改めたが、「實」「證」「龍」「廣」「盡」「應」などについては正字体を使用し、異体字は「マ」「𠂔」「𠂔」「𠂔」などについてのみ使用した。

一、釈文下段のアラビア数字は木簡の長さ（文字の方向）・幅・厚さを示す（単位はmm）。欠損している場合は括弧つきで示した。その下の三桁の数字は型式番号を示す。またそれぞれの発掘機関での木簡の通し番号は最下段に示した。

一、釈文に加えた符号は次の通りである（七頁第1図参照）。

「」 木簡の上端ならびに下端が原形をとどめていることを示す（端とは木目方向の上下両端をいう）。

< 木簡の上端・下端に切り込みのあることを示す。

×× 抹消された文字であるが、字画の明らかな場合に限り原字の左傍に付した。

○ 穿孔のあることを示す。